

電子居場所併設型ひきこもり地域支援拠点 運営研究事業

特定非営利活動法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク
〒064-0824 北海道札幌市中央区北4条西26丁目3番2号

助成事業の概要

ひきこもり当事者や家族が社会的な孤立感から解消されるとともに、ウイルス感染への恐怖感や彼らの心身の健康の保持を念頭に、新型コロナ禍に対応した「電子居場所併設型ひきこもり地域支援拠点運営事業」を実施した。本事業では、ひきこもり実態調査も未実施で地域に開かれた当事者会や居場所がない O 市、E 市、T 市の 3 地域に加え B 市においてサテライト型の居場所を開設し、オフライン（リアルによる会場開催）とネット会議システム zoom を活用したオンラインを併用したハイブリット型による全国的にも珍しい居場所を運営した。実施に際しては本事業に賛同する共催後援団体機関による現地実行委員会を各地域に発足し、実施時期や内容・運営方法等を検討した。本事業では専門職支援者に加え、ひきこもりピアスタッフが加わる協働体制で実践し、実施内容は事前協議で設定したピアスタッフによる話題提供と、後半は参加人数に応じたグループワーク活動を行った。実施期間は、2021 年 7 月から 12 月までの間に各地域での電子居場所併設型によるひきこもり支援拠点運営モデル事業を 3 地域は 5 回計 15 回、試行事業の B 市のみは計 3 回実施した。

事業の成果

研究事業評価アンケート結果では、4 地域とも「とてもよかった」「よかった」という回答率を合わせると O 市 89.6%、E 市 85.1%、T 市

90.3%、B 市 88.9% と全体の 8 割以上を占める高評価を得た。とりわけ E 市では 9 割以上の高い評価を示した。具体的な理由としては「非常に勉強になり家族のお話きくことができずごくよかった。親が元気でなければ子どもも元気にならない。本当にそうだと思った」という家族ピアスタッフの発表に触発され共感を呼ぶ意見をはじめ、「ピアな関係がとても話しやすい場だと感じた」「当事者、家族が吐き出すことのできる場所であり、実際にかかわってみてとても居心地の良さを感じた」と当事者団体 NPO が積極的に関与し、支援団体機関と協働することによって作りだされる場の雰囲気よかったという意見、そして「当事者、家族だけではなく、支援機関同士での貴重な情報共有、学びの場であった」と日頃忙しくてなかなか連携が取れない支援団体機関がつながる機会にもなっていた。さらに「このような支援は続けることがとても大切だと思う。もう少しあっても良いと思う。来年度も必ずやってもらいたいと思う」といった継続開催を望む声も大きかったことも高評価に結び付く結果となっている。

また、それぞれ地域に共催後援団体による現地実行委員会をつくってきたことにより、開催周知面や会場貸与面などに大きく貢献したことは言うまでもない。

ハイブリット型地域拠点の効果的な運用や課題については、T 市での総括会議で家族会の代表者や支援団体機関からオンラインで参加することの困難性も指摘され、使えない人にとってはハードルが高いことが理解できた。その一方で、ハイブ

リット型を活用して相談員がひきこもり当事者宅を訪問して参加できた事例や集合的な居場所には不安がある当事者が会場内にある別室の相談室にてオンライン受講する事例など新型コロナ禍の中で支援につながるケースが多数見られた。

居場所活動における支え合い活動で大きな力を発揮してきたのがひきこもり経験を有するピアスタッフの役割で参加者や支援者からの高い評価や支持を得てきた。ひきこもり分野におけるピアサポートに対する理解啓発が遅れている現状など克服すべき課題も顕出された。

成果の広報・公表

2022 年 1 月から 3 月にかけて本事業の総括として、「電子居場所併設型ひきこもり地域支援拠点運営研究事業報告書－ひきこもりハイブリッド型プラットフォーム構築に向けて－」（A4 判全 42 頁モノクロ左無線綴じ印刷製本 300 部）をまとめ発行し、北海道内の当事者団体や家族会、ひきこもり支援関係団体機関に郵送配布した。またこれと同時に当 NPO の HP や SNS (Facebook や Twitter)、会報「ひきこもり」で発刊について告知して希望者の手元にも届くように配慮した。

電子版 PDF については、ひきこもりに対する批評が多く散見する現時点においてはネット上において全公開はしていないが、希望者には電子版 PDF を配布しているところである。時代はインターネットではあるが、経済的諸事情や高齢家族などオンライン活用できない層が一定数存在することはおさえておくことが必要であり、紙媒体と電子媒体両方をうまく活用して広報していきたい。

なお、電子居場所は一長一短あるものの、今後のハイブリット運用を検討していく基礎資料の一つとして本研究報告書が議論を深めていくきっかけ

けとなっていくことを期待してやまない。

今後の展開

本研究事業を通してピアサポーターとしての役割が支援現場で期待されてきた一方で、これまで「当事者性（ピア）」の分析や考察がなされてこなかった。そのため、ひきこもり支援現場で注目されているピアサポーターの意義や効果的な活動体系を明らかにすると同時に、当事者、家族、支援者、さらに一般市民とのプラットフォーム上での交流を通してどのような相乗効果が形成されていくかを検証していくことが課題として残されている。ひきこもりハイブリット型プラットフォームにとってかなめとなるピアサポーターに対する評価が非常に高かったことは、今後の支援現場に必要不可欠な人財として位置づけていきたいところであるが、残念ながらひきこもり経験知に対する正当な対価や報酬が保障されていないのが現状である。今後とも当 NPO は、当事者団体として各地域の現地支援団体機関との連携を図りながら、ひきこもりピアサポート体制の充実を推し進めていきたい。